様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００３９０

研究課題名（和文）シェイクスピアの視覚的表象の研究

研究課題名（英文）Study on the representation of visual images in Shakespeare's plays

研究代表者
冬木　ひろみ（Fuyuki, Hiromi）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：１０２２９１０６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では1600年前後および後期のシェイクスピア劇に見られる視覚表象の手法を分析していったが、劇作家の手法はエクフラシス的描写から次第に難解で歪み・ねじれを伴ったマニエリスム的な筆致が多くなってゆくことが確認できた。ただしシェイクスピアの視覚表象の手法の変容は、これまで指摘されてきたベン・ジョンソンの仮面劇の影響だけでなく、それ以上の比重でシェイクスピア自身の筆致が視覚重視へ、つまりセリフのない舞台上の表現を入れ込むことへとシフトしていったことがわかった。さらに後期の劇においては当時の偶像崇拝に対する規制の中でスリリングに「神秘的な見せる場面」を現出させる手法へと繋がってゆくことを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで視覚に関する研究を重ねてきた私見によると、シェイクスピアの視覚的な表現は、比較的単純に絵画的に場面を描くことから始まり、次第に言語の力を越えた、マニエリスム的なねじれを持った絵画の手法を彷彿とさせるものになっていったと考えられる。それは彼自身の劇作過程における言語表現の変容・深化を表すとともに、この時代の文化の中の劇のあり方の方向性を如実に表すものでもあったのではないだろうか。この点を解明する本研究は、時代の中におけるシェイクスピアの劇作手法の過程を新たな視点から実証的に示すことにつながるであろうと考えている。

研究成果の概要（英文）：This research analysed the methods of visual representation in Shakespeare's plays around 1600 and later, and found that the playwright's methods gradually shifted from Ekphrasis to more difficult, distorted and twisted Mannerist-like writing. However, the change in Shakespeare's technique of visual representation was not only due to the influence of Ben Jonson's masques, which had been pointed out in previous studies, but also to a shift in Shakespeare's own writing style towards an emphasis on the visual, that is, the inclusion of stage representations without dialogue. Furthermore, it was shown that in the later plays, Shakespeare's approach was to thrillingly present 'mystical scenes' in the context of the religious restrictions on idolatry at the period.

研究分野：16－17世紀イギリス演劇

キーワード：シェイクスピア　マニエリスム　エクフラシス　視覚表象

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

シェイクスピアおよび 16～17 世紀におけるイギリス演劇における視覚表象に関する先行研究としては、古典とも言えるキャロライン・スパージョン (Caroline Spurgeon, *Shakespeare Imagery and What it Tells us*, 1935）や図像の解明を解釈学に押し上げたエルヴィン・パノフスキーの『イコノロジー研究』(1971)、グスタフ・ルネ・ホッケの『迷宮としての世界』(1966)、国内でも岩崎宗治（『シェイクスピアのイコノロジー』1994）や松田美作子のエンブレム研究（『シェイクスピアとエンブレム』2012）などがあり、さらには蒲地美鶴の『シェイクスピアのアナモルフォーズ』(1999)は近年でのこの分野の優れた成果の一つだと言える。

しかしながら、これまでの視覚表象に関する研究は、シェイクスピアの言語によるイメージがどのような実際の文化や宗教的概念を表すものかを示す一方、言語面のレトリックと、言葉が観客の想像力の中に喚起する表象されるはずのもの（絵画・エンブレムの図や場面のイメージ）の差異には目が向けられていないように思われる。またもう一つ重要なことに、視覚的な表象のあり方を分析する場合に、文化的・宗教的・政治的な背景は考慮しても、作品の通時的な変化についてはほとんど考慮されてこなかった。だが、シェイクスピアの視覚的な表現は、比較的単純に絵画的に場面を描くことから始まり、次第に言語の力を越えた、マニエリスム的なねじれを持った絵画の手法を彷彿とさせるものになっていったと考えられるが、その部分に関する研究はまだ包括的には行われていない。

２．研究の目的

本研究課題は、シェイクスピアの言葉の使い方が、劇を書き進める過程において、特に絵画的な視覚表象という点で次第に変化していったのではないか、その過程を劇界および文化の変化の中で分析し明確にすることを主眼としている。シェイクスピアの視覚表象の一つの大きな現れ方が、観客の「想像力」を喚起する手法であり、それがシェイクスピアのキャリアの後半に向かうに従って複雑になってゆき、言語より視覚を優先させる絵画的な場面を作り出すようになっていったのではないかと考えられる。これは、ゴードン・マクマランのシェイクスピアの筆致の変容に関する研究（Gordon McMullan. *Shakespeare and the Idea of Late Writing*, 2007）にも多くを負っており、視覚表象と言語の関係性をより精緻に分析することにより、シェイクスピアの劇的キャリアの中で言語と目に見える舞台の表象との関係の変化を明確にできるのではないかと考えている。さらに、視覚面での舞台表象が当時の偶像崇拝に対する規制と対立することも考察することにより、特に最後の劇群の一つである『冬物語』では、スリリングな舞台における視覚的な場面を作り出していったのではないかと考えられる。

上記のように、本研究ではシェイクスピアの劇作過程の中で視覚的な場面の表象の手法の何がどのように変化・変質していったのかを具体的な例とともに明示することを目標とする。またもう一つの特徴として、文化・政治論的にではなく、シェイクスピアのテクストと舞台表象の関係性から捉えることで、これまでになかった個別の作家の筆致というミクロから文化的な動向というマクロへと通じる視点を得ることも本研究の目的である。

３．研究の方法

本研究では、シェイクスピアの言葉のレトリックが描き出す視覚的な表象の手法を個別の劇を取り上げて明らかにしてゆく。さらに、当時の大陸も含めた絵画理論と演劇テクストとの関係性も考慮に入れつつ、劇作における時間的推移の中で、シェイクスピア自身の絵画的な手法が変容してゆく状況をテクストの言語の変容を分析することにより示してゆく。またシェイクスピアの同時代人である劇作家ベン・ジョンソンと彼と組んだ舞台美術・装置家イニゴ・ジョーンズの仮面劇の影響についても詳細に探ってゆく。なお、絵画論からシェイクスピアの視覚表象を論じたマクエルロの名著（Jean-Pierre Maquerlot, *Shakespeare and Mannerist Tradition*, 1995）では、時代の精神がシェイクスピアの後期の劇には及んでいないとしている。しかしながら、シェイクスピアの筆致からはより複雑なマニエリスム的な言葉の描き方、例えばミケランジェロのシスティーナ礼拝堂の天井画にあるような、ある種の演劇を凌駕するような手法がシェイクスピアの後期の劇にはあるのではないかという前提のもとに、個別のテクストの分析を進めた。また、学会において舞台表象としてのシェイクスピアの手法を発表した際に、海外の研究者から得られた知見も舞台表象への研究方法に資するものとして活用した。

４．研究成果

本研究テーマに関わる分析および発表した論文において 1600 年前後および後期のシェイクスピア劇に見られる視覚表象の手法を分析していった結果、劇作家の手法は言葉で絵を描くかのようなエクフラシス的描写から次第に難解で歪み・ねじれを伴ったマニエリスム的な筆致が多くなってゆくことを示した。ただしシェイクスピアの視覚表象の手法の変容は、これまで指摘されてきたベン・ジョンソンの仮面劇などの影響だけでなく、それ以上の比重でシェイクスピア自身の筆致が視覚重視へ、つまりセリフのない舞台上の表現を入れ込むことへとシフトしていったことが明確になってきた。

研究期間に論文として発表した成果は以下のものである。

① シェイクスピアの作劇法が変化したと考えられる 1600 年より前の劇の視覚表象の特異性を調査・分析することから始め、これまであまり視覚面からのアプローチがなされていなかった劇の一つである『お気に召すまま』には、エクフラシスと考えられる表現から、後期の劇に特徴的なイリュージョン（一種の錯覚を起こさせる描き方）を示唆するものまでが存在することがわかった。1599 年頃とされるこの劇には、仮面劇風の神ハイメンが登場することも象徴的であり、この点も後期の劇作家の筆への連続性を想起させる。

② 『十二夜』には、人物構成の二重性による一種のだまし絵的な要素があることはすでに指摘されてきたが、本論文では‘natural perspective’という劇中の言葉に注目し、一種の錯視としてのパースペクティブという視点からこの劇全体を分析した。双子が出会う最後の場面における‘this is and is not’という二重性とパラドックスを孕んだ表現は、奇妙な錯視を起こさせるとともに、この場面が言語と超えて視覚に優位性を与える試みであることを示した。

③ 『リア王』における視覚表象の特異性についてパラドックスを中心に分析した。『リア王』では視覚に関する表現がとりわけ多いが、それらが見ることを逆説的に捉えるパラドックスとして表現され、さらに特徴的なのはそれらが人間の視覚の脆弱性だけでな

く矛盾を孕んだマニエリスム的な表象となっている。それは、最後のコーディーリアの亡骸を抱いたリアのマニエリスムそのものと言える逆ピエタの場面でその頂点に至ることを示した。

④ 共著書籍 *Shakespeare in Succession* において、日本における『ハムレット』の翻訳の差異を取り上げた。『ハムレット』のテクストの詳細な比較分析により、アーデン版などの原文テクストにも記載されていないような舞台表象に関わる詳細な言語の解釈が翻訳というフィルターにより逆に可能になることを示した。また、台詞として言語化されていない空白の部分に込められた舞台表象の可能性が翻訳の言葉を通して見えてくることがあることも示唆した。

さらに当時の宗教的な面からの偶像崇拝に対する規制の中でスリリングに「見せる場面」を現出させる『冬物語』へと繋がってゆくことについては、現在書籍出版に向けてまとめつつある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 冬木ひろみ	４．巻 68
２．論文標題 『リア王』における「見ること」のパラドックス	５．発行年 2023年
３．雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	６．最初と最後の頁 185-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 185-	４．巻 67
２．論文標題 パースペクティヴから読む『十二夜』	５．発行年 2022年
３．雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	６．最初と最後の頁 139-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 冬木ひろみ	４．巻 106
２．論文標題 シェイクスピアの視覚表象――『お気に召すまま』をめぐる一考察	５．発行年 2020年
３．雑誌名 英文学	６．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 冬木ひろみ
２．発表標題 『アテネのタイモン』における貨幣・友情・病
３．学会等名 第60回シェイクスピア学会（パネル・ディスカッション）
４．発表年 2022年

１．発表者名
Hiromi Fuyuki

２．発表標題
Ninagawa in Stratford: Reconsidering His Productions of King Lear and Titus Andronicus

３．学会等名
11th World Shakespeare Congress（国際学会）

４．発表年
2021年

１．発表者名
冬木ひろみ

２．発表標題
ページとステージの相互関係

３．学会等名
日本英文学会関東支部秋季大会

４．発表年
2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 Hiromi Fuyuki. Eds. by Michael Saenger and Sergio Costola	４．発行年 2023年
２．出版社 McGill-Queen’s University Press	５．総ページ数 321
３．書名 Shakespeare in Succession: Translation and Time	

１．著者名 冬木ひろみ、甚野尚志、河野貴美子、陣野英則、廣木尚、伊川健二、渡邉義浩、飯山知保、新川登亀男、上原麻有子、常田槙子、橋本一径、パトリック・シュウェマー、雪嶋宏一、牧野元紀、小山勝、和田敦彦	４．発行年 2019年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 432
３．書名 近代人文学はいかに形成されたか	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Feature: シェイクスピア研究 vol. 1, 2, 3
https://www.waseda.jp/inst/research/news/70764, 70787, 70812
Adapting Shakespeare for the Stage Today
https://www.waseda.jp/inst/sgu/news-en/2019/04/12/5123/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	The University of Birmingham	The Shakespeare Institute		